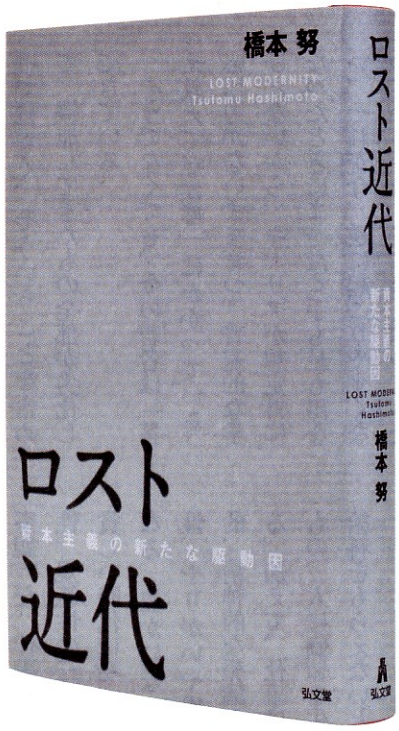

Review レビュー

01

ロスト近代
資本主義の新たな駆動因

橋本 努 著

弘文堂
2310円／416ページ

profile

はしもと・つとむ
北海道大学大学院経済学研究科教授。専門は経済思想、政治哲学、社会理論。1967年生まれ。横浜国立大学経済学部卒業。東京大学大学院総合文化研究科課程博士号取得。著書に『自由の社会学』『経済倫理＝あなたは、なに主義？』『帝国の条件』。

現代の歴史的位相を大局的につかむ

評者 首都大学東京社会科学研究科准教授 **若森みどり**

現代社会に蔓延する息苦しさや将来への不透明感は、日本ではここ十数年の間にすっかり日常生活の一部になっている。今や昇進や昇給を期待できないばかりか、年々減り続ける所得に我慢して当分は働き続けなければならない。特に買いたいものはないし、高価なブランドの小物や車もそれほど欲しくはないのが本音だ。さらに考えてみれば、人生の目標となる役割も、望ましい社会の形も、政治の姿も思い描くことが難しい。

こうなったのは、いつからだろうか。なぜなのだろうか。この斜陽に包まれた社会は、どのような歴史的な位相として大局的にとらえられるのか。本書はこうした疑問に正面から答えてくれる。

著者によれば、私たちは現在、「勤勉」に働くことがそれほど報われず、また、「欲望」消費の快楽にそれほど期待を寄せることもできなくなった、「ロスト近代」の時代モードの中で生きている。この十数年間、経済はほとんど成長せずに、低迷を続けている。人口は減少傾向にあり、少子高齢化がますます深刻になっている。バブル経済を駆動していた贅沢な記号消費に彩られたポスト近代社会は終焉したのだ。

そして、2011年3月11日に発生した東日本大震災とその後の原発事故が、日本社会のあり方を根底から揺さぶるほどの衝撃を与える。原発行政を主導した官僚制マシーンとしての近代国家の威信が大きく揺らぎ、放射性物質による生命の緩やかな致死の恐怖におびえている私たちが喪失（ロスト）したのは、「未来」である。

しかしそうだからといって、日本の未来を悲観するのは性急である、と著者は言う。

本書が分析し提示するのは、「未来」の喪失感覚が広がるロスト近代の「駆動因」となりうるものである。そこでカギとなるのは「未来」への「寄与」（贈与）である。ロスト近代の福祉国家モデルとしては、女性の雇用継続と将来世代への支援策に重点をおいた「北欧型の新自由主義」の可能性が検討される。ロスト近代の資本主義においては、環境問題への対応とエコロジカルな生活様式の企て（グリーン・イノベーション、自然の模倣＝バイオミミクリー、環境市民など）が重要になることが示唆される。

ロスト近代社会の駆動因について考えることは、近代でもポスト近代でもない、ロスト近代に生きる私たちがいったい何を根源的に求めているかを、鋭く深く問うことでもある。一人ひとりが、そして私たちの社会が、新たな「潜在的可能性」をひらいてゆくための手がかりを、本書は示している。

目次

ロスト近代

第1章 近代・ポスト近代・ロスト近代
第2章 ロスト近代 表層から深層へ
第3章 格差社会論 ゼロ年代の中心
第4章 北欧型新自由主義の到来
第5章 ローマ・クラブ型恐慌への不安と希望
第6章 グローバル化の逆説
第7章 3・11大震災と原発事故を考える
第8章 グリーン・イノベーション論
第9章 ロスト近代の原理